説教20220731コロサイ３：5-17ルカ12：13-21「古い人を脱ぎ捨てて」

「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」ある人がこんな風に言っているのを聞いて、現代に生きる私たちはどう思うでしょうか。それは言い方や表現にもよるのでしょうが、もうちょっと柔らか目に「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができました。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しみましょう」などど誘われれば、嬉々としてついて行く人も多いことでしょう。

今日のルカ福音書で、イエス様はこのような生活を厳しく非難されていますが、残念なことにそれは現代人の標準的な生き方になっていて、大半の人々がそれに疑問も持たないまま、むしろ肯定的に生きているように思われます。

ところがイエス様の言われることは正しくて、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』という事態が、将に目前に迫っているような時代に私たちは生かされています。でも私たちは焦ったり心配したりする必要はありません。むしろ、この時にこそ、イエス様の御言葉を聞き、それに従うチャンスが与えられているのです。

でも、私たちはイエス様に対して、なぜ世の中がこんなことになるまで、ほうっておかれたのですかと、泣き言の一つでもいいたくなるくらいでしょう。或いは21節、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」という御言葉に聞き従わなかった私たち人間が、今、当然の報いを受けているだけなのでしょうか。黙想して参りましょう。

この２１節の御言葉では、自分のために富を積むことと、神の前に豊かになることとが区別されて、イエス様は、自分のために富を積んではいけません、神の前に豊かになりなさいと、私たちに命じられています。ここで富を積むことという語句と、豊かになることという語句を比較してみますと、どちらかと言えば富を積むことには否定的な、そして豊かになることには肯定的な語感があります。だから私たちはお金儲けは悪であり清らかに情操豊かに生きることが善であるなどと判断しがちです。ところがイエス様の言われたいことの主眼はそこにはなくて、イエス様は、自分のためにか、それとも神のためにであるか、ということの方に主眼を置いています。新しい聖書協会共同訳では、神の前に、というところを、神のために、と、訳し直されていて、両者を比較しやすくなっています。つまり自分の為にではなく、神のために富を積み、豊かになることをイエス様は私たちに命じられているのです。

問題は、この世を生きる私たちにとって、自分のために富を積んでいるのか、神のために富を積んでいるのかは、そんなにはっきりとは分けられないということでしょう。会社を経営されている方ならば、利益は現実的に会社に積み上げなければ、会社は成り立ちませんし、そうして会社に積み上げられた利益が、現実的に神さまへと捧げられるということもあるでしょうから、自分の為か或いは神様の為かは、この世にあってそんなにはっきりとはしていないのです。でも人間の目にははっきりしていなくても神の目にははっきりと見られているのです。

コロサイの信徒への手紙３章12節「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。」このようにパウロは言っていますが、神から選ばれ、神のために富を積み、豊かになる者には、自ずと憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容が身について来るということでしょう。それは自分の目からははっきりしないし、自分から身に着けようと思っても身につかない将に神からの豊かな賜物を恵まれるということでしょう。こういったよい賜物を身に着けていくことをイエス様は、神のために豊かになると言われているのでしょう。

それに対して、自分のために富を積む生き方をしてきた人はどうでしょうか。そういった人は逆によくない性格が身についてしまいます。３章５節から、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲、７節から、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉、こういった悪い性格が身についてしまうのです。

マタイによる福音書/ 07章17節から

すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。

良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。

良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。

このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」

これはイエス様の厳しい御言葉ですが、その通りで、私たちが自分のために富を積んでいるのか、あるいは神のためになのかは、当初は自分たちには分からないけれども、イエス様は全てお見通しなのであり、そうしてそれぞれにふさわしい実を私たちにお与えになり、その実を以って私たちは、後になって、現実的に知らされるというわけなのです。

実におそろしい成り行きですが、冒頭申し上げました通り、イエス様と歩む私たちは、何も焦ったり心配する必要はないのです。私たちに必要なのはただ一つです。17節、「何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。」ということを実践していくことだけです。

神のために富を積み、豊かにされるというのは、イエスキリストが全てであり、全てのものの内にイエスキリストがおられるということです。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、

造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するということです。

教会ではこの様に説かれ続けてきました。今も生きて私たちと共におられるイエス様は、この様に私たち人間に語り続けておられるのです。しかし、一方で「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」という言葉に安易に従って行く、現代の私たちの現実があります。イエス様は、そんな安易な生活に浸っている私たちから、身を引かれたのでしょうか。どこか遠くへ行ってしまわれたのでしょうか。そうではありません。実は、自分のために富を積むような生活を続ける人のそばにもイエス様は居られるのです。そのことを見て参りましょう。

今日のルカ福音書のいわゆる「愚かな金持ち」のたとえをイエス様がなされた発端は、群衆の一人がイエス様に「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」と依頼したことにあります。ユダヤ人にとって遺産の相続の問題は命に係わる重大事でした。兄エサウから祝福をだまし取ったヤコブの話がありますが、祝福を受けて遺産の正式な相続人になるということは、人の命に連なっていくという、系図に連なるという重大事だったのです。系図から外されると、自分の命はそこでえてしまうというような実感は日本人でも分からないでもないかも知れません。そのような重大事をこの群衆はイエス様に依頼したのでした。この群衆にしてみれば、並み居る律法の専門家よりも秀でているイエス様に保証してもらえば、遺産相続は万全だとでも思ったのでしょう。だからこの群衆はイエス様に律法に基づく遺産相続の実務を依頼したのでした。

でも、イエス様の思いはもっとはるかに高いところにありました。イエス様のお応え。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」イエス様は逆にこの群衆にこの様に問い返したのですが、このイエス様の質問に素直に答えられる人は幸いです。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」それは、父なる神です。ヨハネ福音書に書いてある通りです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」これらの御言葉から分かります様に、父なる神がイエス様を、私たち人間の処へと遣わされたのです。

知らないということは、恐ろしいことで、この群衆はイエス様の隣りにいながら、イエス様のことを良く知らなかったのです。だから、なんの悪気もなく魂胆もなく、一人の律法の専門家に依頼するがごとくイエス様にこの様に依頼したのであります。

そしてこんな群衆たちに向けてイエス様は、「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」と話しはじめられるのです。イエス様はこの時、はっきりと、既存のユダヤ教の遺産相続による祝福が、人の命を救わず、様々な貪欲を偶像崇拝することにつながることを明言されたのでした。

私たちは「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」という生活に、当初は何の罪悪感も持たず、むしろそんな生活を善いことだなどと思ってしまいがちですが、コロサイの信徒への手紙に書いてある通り、そんな生活がやがて、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を生み出すことも経験上知っています。ですからこの「食べたり飲んだりして楽しめ」という生活は一つの誘惑として私たちに迫って来るのです。

しかも、イエス様と共に生活していると思っていても、この誘惑は私たちに迫ってきます。イエス様が常に完全に私たちをこの誘惑から守ってくれるとは限らないのです。それはなぜでしょうか。それはこの「食べたり飲んだりして楽しめ」という生活が貪欲という偶像崇拝に基づくものだからでありましょう。

この群衆はユダヤ教の祝福は知っていたけれども、イエス様による祝福は全く知りませんでした。イエス様からの祝福というのは、実の親から受ける遺産相続の祝福よりも比べ物にならないくらい豊かであります。

ガラテヤの信徒への手紙/ 04章 06節

あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。

私たちは、聖霊を頂き聖霊に満たされて、父なる神よ、と祈ることが出来ます。その時、私たちは御子イエスと共に、父なる神の子とされているのです。もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。とロマ書に書いてある通り、私たちは全てのものの相続人とされるのです。それはあまりにも大きすぎ豊か過ぎて、かえって実感がわきませんね。

ともかく、私たちの思いをはるかに超えた豊かなものが、私たちには相続されるのです。それに比べて、この群衆の相続した物の乏しさは比較にならないほど小さいのです。でも、私たちは自分自身が思い描ける財産の方に目を向けそれに確実に心奪われるのです。さらに、聖霊を知らないこの群衆は、イエス様を自分のために利用しようとしてしまうのです。

イエス様が近くにいても、聖霊に満たされていなければ、私たちもこのような罪に陥らないとも限りません。私たちは、今、聖霊に満たされていることを喜び、聖霊の実りを豊かに受け取っていく生活を続けて参りたいと願います。

祈ります

天の父

あなたは、いつも私たちに大きな恵みを恵んで下さいます。憐みの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を私たちに豊かにお与えください。そうしていかなる苦難の時にも、喜んでいることが出来ますよう、私たちを御言葉に生きる者としてください。

御言葉の通り、自分の命を救おうとすることが、かえって命を失うことになる、ということが今、起こっています。どうか私たちがあなたの御言葉に聞き従い、それを行う者となり、まことに自分の命を見出すことが出来ますよう、私たちを守り導いて下さい。

命が失われていくことは悲しいことです。御子が立ち上がらされたように、どうか私たちをも死から立ち上がらせて下さい。全地を受け継ぐ相続人として最後まで信仰と希望と愛の内に豊かに歩むことを得させてください。

父と聖霊とともに